家族がえがおになれるごはん

ときわ小学校　三年　きくち　そうま

朝、一日のはじまりのたきたてごはん。おばあちゃんは金色のお茶わんにごはんをよそると、ゆげの出ているうちにぶつだんへ運ぶ。しゃしんのひいおじいちゃんがにっこりわらっているようにぼくにはみえた。

ふーん。ひいおじいちゃんもごはんがすきか。そういえばおばんの時、おばあちゃんはおはかにもたきこみごはんを作っておそなえしていたな、と思い出した。おじいちゃんの作ったお米はごはんになって、ご先ぞ様とぼくたちの心をつないでくれている。そう思ったらお米のパワーはすごいなと思った。

ひいおじいちゃんがやっていた米づくりは今はおじいちゃんが引きついでいる。田植えやいねかりの時にはぼくのお父さんもきかいを運てんしておじいちゃんを助け、ぼくもなえのはこをあらったり、かんそうきの温どをほうこくしてお手伝いする。田植えが終わっ

たあとのほっとした顔。いねをかったあとのもみのいいにおい。そしてピカピカの新米を想ぞうするだけでぼくはえがおになる。みんなできょうカしてできるお米には、作る人のたくさんの思いがつまっているんだ。

ぼくはおじいちゃんの田んぼの見回りにっしょについて行った。緑色のいねは少しずつ黄色くなり、よく見るとほが一れつにならんで大きくせい長していた。

「おじいちゃん、今年もいいお米がとれそうだね。もうすぐ新米に会えるの楽しみ。」

そう言うと、おじいちゃんもうれしそうにわらっていた。ひいおじいちゃんのバトンは今、おじいちゃんがしっかりうけついでいる。ぼくもこのバトンをつないでいく力になりたい。大すきなごはんをまもっていきたいと思った。

ぶつだんのひいおじいちゃんがいつまでもわらっていられるように、こんどおとまりした日の朝はぼくがほかほかのごはんをとどけてあげようと思う。